

2020 年度後期基礎演習フィールドワーク報告書

みんぱくフィールドワーク



第 2 波と第 3 波の谷間を利用し国立民族学博物館を訪れた（撮影：渡辺和之、2020 年 12 月 17 日）

阪南大学国際観光学部

渡辺ゼミ

みんなくレポート

国際観光学部教員 渡辺和之

2020 年 7 月、渡辺ゼミでは 13 人の 2 年生を迎えてゼミをはじめることになった。今年は全 13 人（男子 8 名、女子 5 名）中、4 人が中国からの留学生という国際的な構成になった。

夏休みが明けると、本格的にゼミが始まる。秋のフィールドワークは、これから学ぶテーマを深めると同時に、新しいメンバーと親睦を深めるという目的もある。2020 年度には、11 月後半にフィールドワークに神戸に行く計画を学生が立てたが、折からのコロナ禍ある。第 3 波が猛威をふるうなか、休日に三宮のような人混みにゆくのはちょっと不安があるということになった。もたもたしていると、再び緊急事態宣言が発令されるのではないかと。そうするとせっかく許可されている日帰りのフィールドワークも取り消しになるばかりか、授業もゼミを含め、すべて遠隔に戻る可能性がある。ならば、平日の博物館ならよいのではないかと、12 月 17 日（木）に国立民族学博物館（みんなく）を訪れることにした。

結果として、みなそれぞれ館内を見学し、楽しんでいた。留学生には、中国語の展示ガイドも貸してもらった。私も初めて日本語の展示ガイドを付けて見学してみた。また、今年は、事前学習をした上で、見学に臨んだ。学生には見学前に季刊民族学の記事のなかから好きなものを選んで読むように言っておいた。学生たちは、展示場で関係するものを見て、レポートを書いてきた。展示を見て興味を持ったテーマで、もう一度季刊民族学を借り直して調べた学生もいた。フィールドワークというのは、意図したこととは違う発見があるからおもしろいのである。

コロナ禍で今年も海外に出ることは難しそうである。でも、国内でしっかり自分の関心のあることを調査しておけば、海外で調査する時にもきっと役に立つだろう。2021 年度は日帰りで行ける所で調査してみたい。できることをできるときに進めておくのが何よりも重要なのだろう。

民博からわかるパイワン族

国際観光学部 2 年 山出梨奈

私たちは万博公園の中にある国立民族学博物館でフィールドワークを実施した。私がいちばん興味を抱いたのは、台湾の原住民の暮らしである。台湾の人々がどのようにこれまで生活してきたのかこれから述べていきたい。



写真 1-1. 台湾原住民の展示コーナーにて
(国立民族学博物館蔵、撮影：山出梨奈)

した伝承に登場し、刺繍のモチーフによく用いられ、基調となる赤、黄、緑の色は着用するものを守護する色である²⁾。儀式や特別な日に着る衣装とだけあって、奇抜な衣装だと思った。細かな刺繍があちこちに施されていた。

次に私が興味を持ったものは「パイワン族青銅刀」である。青銅刀はパイワン三方宝のひとつで、「陶壺」・「トンボ玉」・「青銅刀」がパイワン族貴族の宝とされている。結婚や賠償などの際には重要な役割を担っている。この三宝はいずれも伝統的なパイワン族たちが日常生活の中で大量に生産したものではなく、数が限られていたため、次第に珍しい品として扱われるようになった。パイワン族も、パイワン三宝の起源や制作方法は不明だということだが、現在では陶壺やトンボ玉は大量生産が可能となった。ただし、青銅刀のみ、その生産方法が不明となっており、資料も少なく謎に包まれている³⁾。

台湾の原住民「パイワン族」

パイワン族とは、オーストロネシア系の先住民族である台湾の原住民である。平地や島部に居住していた一部の人たちを除き、その大半が山岳地域に居住してきた。アワや根菜類の焼畑栽培、狩猟活動を慣習的な生業としてきた¹⁾。展示コーナーではパイワン族の衣装が飾られていた(写真 1-1)。中央と左の衣装は、婚礼や収穫祭といった儀礼の場で着用されるものだそう。中央の女性の衣装に注目してほしい。太陽と蛇と壺の刺繍が見つけることができる。これは

首長家が誕生

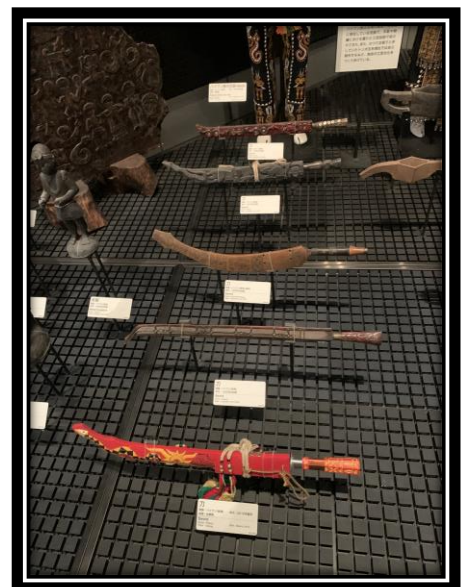


写真 1-2 台湾原住民の展示コーナーにて(国立民族学博物館蔵、標本番号：H0209314、撮影：山出梨奈)

パイワン族の刀は、それぞれ形が全く違うことに驚いた。一直線のものもあれば、今までに見たことのないくらいに曲がっている刀もあった⁴⁾。

最後に

今回のフィールドワークではたくさんの国の民族文化について学ぶことができ、その中でも台湾の民族について興味を持つことができた。国立民族学博物館では、様々な国の衣装が多く展示されており、民族学に詳しくない人でも衣装からその民族の暮らしを想像することができた。その他にもビデオを見ることができるブースや本がたくさんあり、興味を持った分野をさらに学ぶことができた。たくさんの展示物が観覧者を惹きつけ、ものだけで情景を思い浮かべることができる素晴らしい博物館だと思った。

【注】

- 1) 野林厚志 2011「原住民として生きる人びと」『季刊民族学』(財団法人千里文化財団) 137, p.30.
- 2) 国立民族学博物館収蔵資料データベース「パイワン族衣装(台東県)標本番号 H0274450」
<https://www.minpaku.ac.jp/museum/exhibition/main/china/06>(最終閲覧日:2021年1月6日).
- 3) 順益台灣原住民博物館「パイワン族青銅刀」
http://www.museum.org.tw/symm_jp/031_3_03.htm(最終閲覧日:2021年1月6日).
- 4) 国立民族学博物館収蔵資料データベース「パイワン族刀(台東県)標本番号 H0274456」
http://htq2.minpaku.ac.jp/infolib/meta_pub/CsvSearch.cgihttp://htq2.minpaku.ac.jp/infolib/meta_pub/CsvSearch.cgi(最終閲覧日:2021年1月6日).

【参考文献】

- ・野林厚志 2011「原住民として生きる人びと」『季刊民族学』(財団法人千里文化財団) 137: 22-33.
- ・国立民族学博物館「パイワン族の衣装(女性用):標本番号 H0274450」
<https://www.minpaku.ac.jp/museum/exhibition/main/china/06>(最終閲覧日:2021年1月6日).
- ・国立民族学博物館収蔵資料データベース「パイワン族の刀:標本番号 H0274456」
http://htq2.minpaku.ac.jp/infolib/meta_pub/CsvSearch.cgihttp://htq2.minpaku.ac.jp/infolib/meta_pub/CsvSearch.cgi(最終閲覧日:2021年1月6日).
- ・順益台灣原住民博物館「パイワン族青銅刀」
http://www.museum.org.tw/symm_jp/031_3_03.htm(最終閲覧日:2021年1月6日).

アイヌ民族の文化

国際観光学部 2 年 劉洋 (LIU YANG)

2020 年 12 月 17 日、国立民族学博物館をフィールドワークで訪れた。私は日本の少数民族文化に強い関心を持っているため、今回はアイヌ民族の文化を調べることにした。アイヌ民族とはどのような人々なのか。また、彼らはどのように生活してきたか。本レポートでは、アイヌ民族の文化について文献を参考に調べた。

日本の先住民族「アイヌ民族」

朝日小学生新聞によると、アイヌ民族は、北海道を中心に、本州北部や千島列島、サハリン（樺太）南部にいらしてきた。北海道では本州が弥生時代に入っても水田での米作りの文化は広まらず、採集や狩猟・漁労を行っていた。その後、本州や中国などと交流を持ちながら、自然環境に合った独自の文化を築いてきた。その人々の子孫が、アイヌ民族である¹⁾。



写真 2-1 日本アイヌ民族の展示コーナーにて（国立民族学博物館蔵、撮影：LIUYANG）

展示コーナーでは、アイヌ民族の暮らしの様子がある（写真 2-1）。この家のデコレーションから、寒冷な環境に住んでいることがわかる。なぜなら、柱・屋根・壁・床は、木の幹や枝、樹皮、草などの材料で利用して作るからである。これらの材料で屋根、壁などを作ると、保温・断熱効果があり、耐朽性が高い。また、家の中央部に^{かまど}炉を設け、アイヌ人はここで火をたいて、煮炊きをすることができる。この点は生活の需要を満たすだけでなく、アイヌ民族の信仰にも関わる。

『アイヌ文化の基礎知識』によると、アイヌの人々は、人間のまわりに存在する数限りない事象にはすべて「魂」が宿っているものだという。日々の平和な生活の中にはまた、地震、雷、火事、津波、洪水、病気など、各種の自然現象が去来する。

それらの事象がこの世に存在し魂を宿しているということは、「天上の神の国からある使命を担って舞い降りてきて、姿かたちを変えながらこの地上に住んでいる証なのだ」というのである。つまり、天上の世界で別の姿をしているものが、この世にくると動物なり植物なりといった事象に化身するという考えである²⁾。

そして、アイヌの人びとは「火」にも神格化をしてきた。山田孝子氏によると、アイヌの

人々にとって、家の中の^{かまど}炉は火の神が座る場所であり、燃えている火そのものが火の神の魂の顕れであると考えられる。炉は、常に神窓を通して戸外のヌササンが直線上に位置し、ヌササンに祀られるカムイ（神）が神窓を通して火の神と交流できるように配置される。炉の中心の火は絶えやすべからずとされた。妻が不注意で火を絶やすようなことは、姦通と同様に離婚の原因ともなったという³⁾。

以上の資料によって、アイヌ人の自然への敬意や感謝の念がわかった。一番驚いたのは、アイヌ人のカムイに対する信仰である。彼らは自分たちの身の回りの物事をカムイとして考えてきた。だからこそ、これはアイヌ民族のユニークな魅力だと思う。

最後に

今回のフィールドワークでは、各国の民族文化を見学できたのが非常に楽しかった。その中で、自分の国の展示を見たときに、非常に親近感を覚えた。同時に、他の国の視点から自分の国の文化を改めて知ることができた。日本の文化について、一番興味を持ったのはアイヌ民族のことである。大学で履修している授業の中で、何回かアイヌ民族の話を聞いたため、だんだん興味を持っていた。日本に留学する前に、日本は単一民族国だと思っていたが、この間の勉強をきっかけに、日本への認識がまだ足りないことが多かったとわかった。今回の研究では、人間の知恵に感心せざるを得ないことが何度もあった。家の建築、生活用具、食品、服装などのものを通して、異なる国や地域の文化や生活様式の違いを知ることができたのが不思議な感じだ。

【注】

- 1) 朝日小学生新聞「カムイへの感謝、儀式で伝える」『朝日小学生新聞』2016年10月2日.
- 2) アイヌ民族博物館（監修）2018『アイヌ文化の基礎知識』草風館,p.138-139.
- 3) 山田孝子 1996「アイヌの火の神について」『日本文化の深層と沖縄』12, p.105.

【参考文献】

アイヌ民族博物館（監修）2018『アイヌ文化の基礎知識』草風館.
朝日小学生新聞「カムイへの感謝、儀式で伝える」『朝日小学生新聞』2016年10月2日.
山田孝子 1996「アイヌの火の神について」『日本文化の深層と沖縄』12:103-115.

中国の少数民族

国際観光学部 2 年 李俊傑 (LI JUNJIE)

2020 年 12 月 17 日に国立民族学博物館で大学のフィールドワークに参加した。私は、一番興味を持っている中国の少数民族について調べることにした。本レポートでは、中国の少数民族の服装や文化はどうか。また、彼らはどのような生活しているのかについて皆さんにお伝えしていきたい。

国立民族学博物館「東アジア展示・中国地域の文化」によると、中国は漢族を含め 56 の民族で構成されている。そのうち漢族が人口の 90%以上を占め、平野部を中心に全国に居住している。漢族以外の 55 の少数民族は、おもに西南、西北、東北地方の高地や草原に居住しており、台湾には漢族のほか先住のオーストロネシア系民族が居住している¹⁾。各民族は自分の民族文化と生活習慣をもっている。私は、民族の特徴を表す様々な服装に魅力を感じた。



写真 3-1 東アジア展示・中国地域の文化の展示コーナーにて（国立民族学博物館蔵、撮影：李俊傑）

展示コーナーでは、多くの少数民族の服装が展示されている（写真 3-1）。民族によって大きく異なる、シンプルな服装もあり、彩りに装飾がされている服装もある。そのうち、派手な苗族（右から 2 番目）の服装が最も印象に残った。苗族と言え、雲南省である。雲南省は、中国にいる 55 の少数民族のうち、半数以上の 26 の少数民族が住んでおり、中国で少数民族が一番多い省である²⁾。また、雲南省の少数民族のうち、モソ族（摩梭族）という母系、妻問いの習慣がまだ残っている民族がある事に驚き、関心を持った。

「雲南省少数民族紀行」によると、母系制をのこす、雲南省北部の瀘沽湖周辺に住んでいるモソ族は、数少ない通い婚を残す民族として、日本の平安以前にあった歌垣の風習と比較されるなど、歴史や文化の分野で注目され、日本のテレビ番組でも紹介されていたことがある³⁾。

それでは、モソ族は、生活あるいは生計にどのような問題を抱えているのだろうか。1960 年代半ばの文化大革命時代に瀘沽湖周辺で森林が破壊され、その後も 1980 年から 1992 年の間に第二回目の森林破壊が進み、深刻な水土流失の結果、30%の耕地が土砂で埋まり、急激に耕地面積が減少した。この環境破壊により、農業に依存した自給自足の生活が成り立たなくなり、現金収入を求めて観光化へと進まざるを得ない状況に追い込まれた⁴⁾。

中華民族は多民族の統一体であり、56 民族は輝かしい民族服飾や文化を創造してきた。各民族の生活環境と風俗習慣によって宗教・信仰などの民族文化の違いが形成された。今回

のフィールドワークをきっかけに、自分の国の色々な文化を目に触れることで、各民族をより深く知ることができた。私も少数民族の1つである朝鮮族出身だが、私の民族は漢族との文化融合が進んでおり、私の代では漢族とほぼ変わらない。そのため、今回の見学をきっかけにして、自分の民族のこともより深く知ってゆきたいと思った。

【注】

1)国立民族学博物館「東アジア展示・中国地域の文化」

<https://older.minpaku.ac.jp/museum/exhibition/main/china>（最終閲覧日：2021年4月28日）。

2) 曹能秀「雲南省概況」

https://www.ocha.ac.jp/intl/cwed_old/eccd/symposium_seminer/seminar2004/sou_material.pdf（最終閲覧日：2021年10月19日）。

3)中牧弘允 2020「雲南省少数民族紀行」『季刊民族学』173, p.73.

4)同書, p.74.

【参考文献】

中牧弘允 2020「雲南省少数民族紀行」『季刊民族学』173: 73-74.

国立民族学博物館「東アジア展示・中国地域の文化」

<https://older.minpaku.ac.jp/museum/exhibition/main/china>（最終閲覧日：2021年4月28日）。

曹能秀「雲南省概況」

https://www.ocha.ac.jp/intl/cwed_old/eccd/symposium_seminer/seminar2004/sou_material.pdf（最終閲覧日：2021年10月19日）。

旅する楽器

国際観光学部 2 年 溝口千尋

私たちは、12 月 17 日に国立民族学博物館でフィールドワークを実施した。その中で私が興味を持ったのは、南アジアの楽器である。本レポートでは、南アジアの楽器のルーツについて述べていきたい。

寺田吉孝氏によると、「楽器は特定の地域で生まれその場所で何世紀にもわたって伝承されてきた。その土地の『土着型』が無い訳ではないが、圧倒的に多いのは他地域から伝播し定着したものが多く」という¹⁾。特に南アジアでは弦楽器の宝庫で、古典音楽から宗教音楽、民族音楽から映画音楽まで幅広いジャンルで演奏されてきた。南アジアの弦楽器は中央アジアや西アジアから伝えられて改良され定着したものが多く、南アジアでの変容を経て東南アジア、東アジアにも伝わった。さらには、南アジア起源の楽器が周りで広められ、逆輸入される場合もある。南アジアは楽器の伝播に大きな役割を果たしてきた²⁾。

弦楽器の種類としては大きく 3 種類に分かれており、指やピックで弾く撥弦楽器(ギター・^{はつげんがっき}琴)、弓でこする擦弦楽器(ヴァイオリン・二胡)^{さつげんがっき}、木や竹などのバチで打つ打弦楽器(ピアノ・^{だげんがっき}楊琴)^{ようきん}となる。また、張られた弦と楽器の本体の位置関係に基づいて、共鳴胴につけられている棹(ネックの部分)^{さお}が弦の成す面と並行であるリュート系、棹がなく弦の成す面と共鳴胴が平行であるツィター系、共鳴胴と弦の成す面が垂直であるハープに分類出来る³⁾。

ここでは、撥弦楽器についてみていきたいと思う。シタールは、鉢型頸柄リュートと呼ばれるタイプである。このタイプは現在西アジアを中心に南アジアから南西ヨーロッパやアフリカ、さらには中南米にまで分布する。シタールは芸術音楽用と民族音楽用の 2 種ある。前者はヒンドゥスターニ音楽(北インド古典音楽)で使われている。一方、後者には現地の住民が使っている数種の「民俗シタール」がある。タンブラーは低い持続する音を出すドローン専用楽器である。声楽には大型の四弦タイプ、器楽伴奏には小型の四弦タイプ、大型の全長は 1.35 メートル程にもなる⁴⁾。同じ楽器でもシタールが芸術音楽用と民族音楽用で使用用途が分かれることに驚いた。タンブラーに関しては、声楽用と器楽伴奏で楽器の形も音も変わるそうである。

南アジアの撥弦楽器のルーツは、古代インドからリュート系・ハープ系・ツィター系に分かれ、さらにハープ系とツィター系は二つに分かれる。ハープ系の一つはアフガニスタンのワージという楽器に、もう一つのハープ系はミャンマーのサウン・ガウに繋がる。ツィター系の一つはインドネシアに伝わり、もう一つのツィター系はルドラ・ヴィーナーという楽器に連なり、そこから棹の中が空構造の楽器シタールに繋がる。そして、西アジアからタンブール系が伝わり、そこから二つの撥弦リュートに分かれ、一つはパキスタンで様々な撥弦リュートに繋がり、民俗シタールとして南アジアに伝わった。もう一つの撥弦リュートでは、

タンブーラーに繋がり、腹部に共鳴胴をもったものになり、タンブーラーとなった⁵⁾。

フィールドワークで国立民族博物館を訪れた。博物館には、シタールの元となった西アジアのセタールしかなかったが、見てみるとシタールがセタールから伝わってきたのだなと感じられた(写真 4-1)。他にも楽器はたくさんあったが、その中でも撥弦楽器は多いのだなと感じた。別の楽器でも、どんな用途に用いられ、どうゆう流れで地域に根付いたのかなどを調べてみるのも面白そうだと感じた。

今回初めて国立民族博物館へ訪れたが、色々な文化に触れられるような文献や映像・所蔵の品があった。今回テーマにした楽器以外にも、民族衣装や農耕道具などがあり、見ていてとても勉強になった。反面、同じアジアでも楽器のことについて、全然知らなかったのだなと感じた。

【注】

- 1) 寺田吉孝 2018「南アジア、弦の響き」『季刊民族学』42(4), p.4.
- 2) 同書, p.4-6.
- 3) 同書, p.6.
- 4) 小日向英俊 2018「シタールとタンブーラー-南アジアのリュート系楽器の旅」『季刊民族学』42(4), p.20-21.
- 5) 同書, p.26.



写真 4-1 セタール 標本番号 H0001796

(国立民族学博物館所蔵、撮影：溝口千尋)

【参考文献】

寺田吉孝 2018「南アジア、弦の響き」『季刊民族学』42(4): 4-9.

小日向英俊 2018「シタールとタンブーラー:南アジアのリュート系楽器の旅」『季刊民族学』42(4), p.20-26.

国立民族学博物館標本資料目録データベース「セタール 標本番号 H0001796」

http://htq2.minpaku.ac.jp/infolib/meta_pub/CsvSearch.cgi (最終閲覧日: 2021 年 1 月 19 日) .

多様に変化する楽器

国際観光学部 2 年 木下結斐

富田晃氏によると、「リュート属の弦楽器は、紀元前 1500 年頃、メソポタミアで作られたハープ式の弦楽器にネックと呼ばれる部分をつけることで誕生した。その後、ユーラシア大陸から東西に広がっていく中で基本構造は変化せず、その地域の人々がより弾きやすいように素材や形が変化していった。例えば西洋ではヴァイオリンやマンドリン、ギブースなどに変化した。中国では蛇の皮をはった三弦、日本では犬や猫の皮を使用し三味線へと変化した」¹⁾。このように元は一つの楽器だったが、世界各地へと伝播し、楽器は地域の気候や用途に合わせて変化した。

私は国立民族学博物館に見学に行き、多くのギターや弦楽器が展示されているのを見た。地域ごとに大きさが異なったり、装飾がされていたりと、少しずつ異なっているギターが最も印象深かった。南米のギターはアメリカやヨーロッパのギターに比べ、半分以下の大きさなのが特徴である。形状は私たちがよく知っているギターのまま、サイズだけを4分の1程度にしたものや、小さいだけでなく、胴とネックが一つの木材で作られているものもあった。南米のギターの中でも多様であると実感した。

この写真の楽器はウードと呼ばれるエジプトやトルコで盛んに弾かれている民族楽器である(写真 5-1)。ウードはスペインのリュートという楽器の元になったと言う説もある。形状は琵琶によく似ており、ウードにはネックにフレットと呼ばれる板がなく、各コースに2本ずつ弦がはられている。胴の部分は半球のように丸みがあり、「寄木細工や象牙細工など細かな細工が施された響孔が3つある。また、胴の部分はバラ、黒檀、シデ、ウォルナットの4種の植物を交互に張り合わせているため響きが良い」という特徴がある²⁾。

楽器が変化する理由は、その地域特有の生活に合わせて構造が変化した部分もあるが、1番は最もきれいな音色が出せるようにするためである。中国の三弦が日本に伝わった時、「日本には皮をはれる程の大きさの蛇がいなかったため猫や犬の皮が素材となったが、沖縄では中国から蛇の皮を取り寄せて使用していた」という例がある³⁾。また、ウードは、インドの黒檀が使用されている。これは貴重な素材であるため、入手が困難である。しかし、ウードは響きを良くするためにそのような高級な

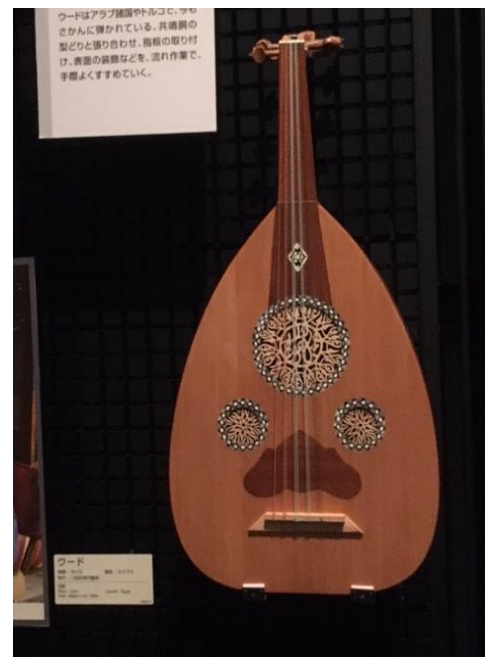


写真 5-1. ウード（国立民族学博物館蔵、標本番号：H0209314、撮影：木下結斐）

素材が使われている。日本に三弦が伝わったとき、犬や猫の皮で代用したと知り驚いた。

【注】

- 1) 富田晃 2015 「音楽の再創造」『季刊民族学』153, p.58.
- 2) 民音音楽博物館 https://museum.min-on.or.jp/collection/detail_G00142.html, (最終閲覧日 : 2021 年 1 月 19 日)。
- 3) 富田晃 2015 「音楽の再創造」『季刊民族学』153, p.59.

【参考文献】

富田晃 2015 「音楽の再創造」『季刊民族学』153:43-83.
民音音楽博物館「ウード」https://museum.min-on.or.jp/collection/detail_G00142.html (最終
閲覧日 : 2021 年 1 月 19 日) .

モアイ像とイースター島（ラパヌイ）の歴史

国際観光学部 2 年 樽見勇輝

はじめに

今回のゼミの活動で、私はイースター島について、大学の図書館の本を読み、国立民族学博物館に見学しに行った。博物館の中で、もっとも自分が興味を持ったのは、イースター島のモアイ像である（写真 6-1）。頭部だけで自分の身長ほどあるモアイ像は、誰が作ったのか気になったため、それを調べた。

イースター島

イースター島がチリの領土であることは、あまり知られていない。この島は南米大陸から約 3700 キロ離れた太平洋に浮かぶ孤島である。名前の由来は、オランダ人ロッセベーンが欧州人として初めて島を発見した日が 1722 年のイースターの日曜日だったためである¹⁾。

現在、イースター島はラパヌイ（大きな端）とも呼ばれている。この名前も実際は 19 世紀後半に島をみたポリネシア人が付けたものだ。ポリネシア人は、サモアやトンガあたりに住んでいて、北はハワイ、南はニュージーランドにも拡散している。その東の果ての地がラパヌイなのである。ラパヌイへのポリネシア人進出は、800 年～900 年頃であるという²⁾。

モアイ像とは

全長 2 メートル程度から 10 メートルにもなるモアイの石像は、土に埋もれているものや未完成のものも含め、1000 を越える個体が確認されている。その多くはラノ・ララクという採石場の凝灰岩を使用している。ここで多くのモアイが作られ、海岸へと運搬された。東ポリネシア一帯ではマラエという祭祀施設が発達しており、そこに作られた石の基壇をアフという。ラパヌイのアフも東ポリネシアの流れを汲むもので、なかでも独自の発達を遂げた宗教的建造物として理解できる³⁾。

重機のないこの時代で、人々はどのようにして像を運搬したのだろうか。イースター島の住民に尋ねると「モアイが自分で歩いて行った」と言うそうである。おそらく、モアイ像を片方に傾け、回転させて前進し、次に反対側を傾け、回転させて前進するという方法だったという⁴⁾。

イースター島の資源

16 世紀以降、石像が作られることはなくなった。その理由をはっきりとはわかっておらず、いくつかの説がある。その一つが環境破壊説である。人口の増加に伴い、森林が少なくなってきた。その結果、焼畑をする森林がなくなってきた、集団間の闘争が激化し、モ

アイ像も破壊されたという。花粉分析によると、800 年～900 年頃は、島は森林で覆われていた。花粉の変遷を辿ると、900 年～1500 年頃に森林が草地に変わっていた⁵⁾。もう一つの説は奴隷説である。1862 年に起きたペルーによる奴隷狩りで、約 1000 人のポリネシア人が奴隷として強制的にペルーへと連れ去られてしまったという⁶⁾。さらに病気説もある。奴隷として連れ去られ、帰還した者によって天然痘が持ち込まれ、島の人口は 100 人余りにまで落ち込んでしまったという⁷⁾。

まとめ

博物館で初めてモアイ像を見た時、自分が想像していた以上に巨大な像に圧倒されてしまった。イースター島の歴史は、今日でもはっきりとは解明されていない。イースター島の自然が他の島々以上に荒廃してしまった事は確かであり、その結果として、モアイ像やアフを創り上げた社会に大きな変化が生じてしまった。ただ、それによってモアイ像が作られなくなったかどうかは明らかではないようだ。モアイ像を作ったイースター島のポリネシア人は、その後、奴隷狩りや天然痘で大きく人口が減ってしまった。これまで学校の授業などで学んできたイースター島の歴史以外にも、今回調べてみて新たにわかったことがあったので、イースター島についての理解が深まった。

【注】

- 1)水野浩二 2019「イースター島」細野昭雄ほか（編）『チリを知るための 60 章』明石書店, p.202.
- 2)野嶋洋子 2010「ラパヌイ（イースター島）」吉岡政徳・石森大地（編）『南太平洋を知るための 58 章』明石書店, p.246.
- 3)野嶋洋子・前掲書 p.248.
- 4)Miloslav(著)、坂本明美(訳)1988『ポリネシアン・トライアングル』佑学社, p. 169.
- 5)野嶋洋子・前掲書 p.249.
- 6)水野浩二・前掲書 p.202.
- 7)野嶋洋子・前掲書 p.250.

【参考文献】

- 野嶋洋子 2010「ラパヌイ（イースター島）」吉岡政徳・石森大地（編）『南太平洋を知るための 58 章』明石書店, pp.246-250.
- 水野浩二 2019「イースター島」細野昭雄ほか（編）『チリを知るための 60 章』明石書店, pp.202-206.
- Miloslav(著)、坂本明美(訳)1988『ポリネシアン・トライアングル』佑学社。



写真 6-1 モアイ像 (国立民族学博物館蔵：標本番号 H0009519、撮影：樽見勇輝)

ニュージーランドの先住民マオリ族の木彫り

国際観光学部 2 年 吉田龍哉

僕たちは大阪万博公園の中にある国立民族博物館でゼミのフィールドワークを行った。20 世紀後半からオセアニアの島々で伝統的な生活用具が消滅していく一方で、失われた文化を復興する動きが強くなってきている。この国立民族博物館のオセアニアコーナーも文化を復興する動きを展示している。僕が国立民族博物館の中で一番興味を持ったのは、ニュージーランドの先住民であるマオリの文化である。なので、マオリ族の伝統的な生活用具を紹介していきたいと思う。

ニュージーランドの先住民マオリ族

マオリ族はイギリス人が入植する前からニュージーランドに住んでいた先住民である。マオリ族でおそらく 1 番有名なのがラグビーでお馴染みの「ハカ」である。「ハカ」とは、マオリ族の民族舞踊である。日本でいう「舞踊」のような存在である。「ハカ」は、本来マオリの戦士が戦闘の前に手や足などを叩き踏みならして自らの強さ示し、敵を威嚇する舞踊である。現在は海外からの渡航者を歓迎する時や、ラグビーニュージーランド代表が試合前に踊る民族舞踊としても有名である。相手を威嚇する舞から相手に敬意や感謝の意を表す舞として変わっていったのである¹⁾。

マオリ族の木彫「パータカ」

次に僕が興味を持ったのは、マウイ族の倉庫「パータカ」である(写真 7-1)。「パータカ」とは、マオリ族にとって欠かせないものである。マオリ族の人々の集会場として使われる。彼らはここへ集まり、語り、歌い、祝い事をし、死者を追悼している。「パータカ」には、マオリ族が手の込んだ装飾が施されている。マオリ族の人々は大切な写真や彫刻など、地域の文化を後世へ伝えるための宝物を「パータカ」に納めている。日本でいう神社の宝物庫のようなものだ。「パータカ」は、食料の保存用の倉庫ではなく、アルバムのような皆の記憶を物理的に保存するための倉庫である。他の国では、倉庫は大抵食料などを保存するために倉庫は使用される²⁾。

しかし、現在は近代的な日用品が出回り、木彫りなどの伝統的な生活用具が敬遠されつつある(写真 7-2)。マオリ族とはいえ、スマートフォンや冷蔵庫などの日用品が入ってきたからである。以前までの食料保管庫が冷蔵庫に代わり、アルバムの写真を納める場所が今ではスマートフォン一つでできるようになり、伝統的なものが消えつつあるという³⁾。

最後に

今回のフィールドワークでは、世界一周したかのような気分になり、色んな国の民族文化を学ぶことができた。僕はマオリ族に興味がとてもあったので、マオリ族について少しは詳しくなったのが良かった。マオリ族といえば「ハカ」という踊りしかイメージが無かった僕でも、マオリ族は多くの文化を持っているということを知ることができた。今回僕が見学した中で「パータカ」という倉庫に1番興味を持った。食料を保存するのではなく、記憶を保存するという倉庫という考え方にとても関心を抱くことができた。



写真 7-1 オセアニア展示場にあるマオリのパータカ(国立民族博物館蔵、標本番号 H0008069、撮影:吉田龍哉)



写真 7-2 オセアニア地方のマオリ族の木彫り(国立民族博物館蔵、標本番号 H0217357、撮影:吉田龍哉)

【注】

- 1) ニュージーランド留学センター <https://newzealand-ryugaku.com/life/maori/>
(最終閲覧日:2021年1月15日)

- 2) ピーター J. マシウス 2011「記憶の倉庫」みんぱくのオタカラ
<https://www.minpaku.ac.jp/museum/enews/121otakara>(最終閲覧日:2021 年 1 月 15 日)
- 3) 須藤健一 2014「オセアニア 伝統文化の消失と復興にむきあう : 太平洋に浮かぶ島々での
収集『季刊民族学』38(4), p.20-22.

【参考文献】

- ・ ニュージーランド留学センター <https://newzealand-ryugaku.com/life/maori/>
(最終閲覧日:2021 年 1 月 15 日)
- ・ ピーター J. マシウス 2011「記憶の倉庫」みんぱくのオタカラ
<https://www.minpaku.ac.jp/museum/enews/121otakara> (最終閲覧日:2021 年 1 月 15 日)
- ・ 須藤健一 2014「オセアニア 伝統文化の消失と復興にむきあう : 太平洋に浮かぶ島々での
収集 『季刊民族学』38(4): 20-22.

人びとにとっての水

国際観光学部 2 年 田中杏

私は今回世界の民族の文化を学ぶのにあたり、水について調査した。飲料用はもちろん水産物や農産物などでも人の暮らしになくてはならないのが水である。だが、現代では水はあって当たり前になっており、贅沢なものだとは思わなくなっている。一方で世界には、気候変動などにより、安全な飲料水の確保すら困難になっている地域が存在しており、水さえも安心して飲めない人々がいる。そこで何が理由でそのような差が生まれるのか、水に関して調査したことを報告したい。

竹川大介氏によると、ソロモン諸島の南マライタといわれる小さな村では、海の上に木で作られたかろうじて立っている家に村人が暮らしており、そこで伝統的なイルカ漁を行い生活している¹⁾。ある時、いきなり自然保護団体がその村を訪れてきた。二年間イルカ漁をしない代わりに補償金を受け取る契約を、村人は自然保護団体と契約し、それを守り、二年間漁に出ることはなかった。しかし、自然保護団体は伝統的なイルカ漁を止めさせたと誇ったり、その間の補償金の支払いが滞っていたりと、村人を裏切るような行為をしていたのである。それにより、村にとって必要な交換財であるイルカは高騰した上に、村の誇りが傷つけられてしまった。その時、先祖伝来の土地を失い、継承されてきた文化を失い、ばらばらになっていた村を変えたのは、携帯電話のアンテナである。それと同時に電気が通るようになり、首都と連絡を取れるようになった。それによって日本で起こった東日本大震災を村人は知った。世界のどこかで起きた様々な事件が島の人々の生活に影響を与えている。つまり海は世界中で繋がっているということである²⁾。

現代では当たり前のように飲料水やトイレ、お風呂などで使っている水。ある地域では水にも神様がいてとされ、儀礼などにも重要とされてきた。森和紀氏によると、水は過去の人達の苦勞の末かなり改善されてきたが、根本的には解決されておらず、現代のグローバル化によっても、深刻な影響を受けている。国際河川の環境保全は、危機管理の一環として現代社会が早急に解決を必要とする課題の一つである。良質な水の安定供給には国際協力の取り組みが必要であり、水と人間活動とのあるべき姿を追求する指針なのである。水質保全にとって重要な課題を今一つ把握し、水環境の再生に向けて新たに始動していく必要がある³⁾。

最後に、今回初めて国立民族学博物館を訪れ、さまざまな国の生活や伝統的な文化を学ぶことができた。思っていたよりも、その地域の生活に使われていたものなどが展示されており、迫力があつた。オセアニアの地域の展示品の中で最も多かったのが、海に出て漁をする道具であつた（写真 8-1）。自分たちで様々な用具を生み出し、その用具で食料を得るなど、自分たちの海での暮らしや島での暮らしに誇りを持って生活しているのが素敵だなと感じた。また、展示物だけに関わらず、さまざまな分野のビデオや本が見れるコーナ

一もあり、いろいろな形で学ぶことができた。展示品や写真などを見て、昔の人たちは資源の限られた環境の中で自らの知識を活かし、たくさん工夫して考え、生活していたことがわかり、現代の人達が学ばなければならないことがたくさんあると感じた。

【注】

- 1) 竹川大介 2013「グローバル化と小さな村」『季刊民族学』145, p.66-68.
- 2) 同書 p.72-74.
- 3) 森和紀 2013「国際河川の管理を巡って」『季刊民族学』145, p.47.

【参考文献】

竹川大介 2013「グローバル化と小さな村」『季刊民族学』145: 66-75.

森和紀 2013「国際河川の管理を巡って」『季刊民族学』145: 50-57.

国立民族学博物館収蔵資料データベース「櫂：標本番号 H0002226～H0002423」

<http://htq2.minpaku.ac.jp/infolib/meta/CsvSearch.cgi?null> (最終閲覧日:2021年1月25日).



写真 8-1 櫂(船具) 櫂：標本番号 H0002226～H0002423
(国立民族学博物館蔵、オセアニア、撮影：田中杏)

国立民族学博物館からわかるキムチ

国際観光学部 2 年 中西崇也

1. はじめに

私たちは 12 月 17 日に大阪府吹田市にある国立民族学博物館でフィールドワークを実施した。国立民族学博物館は大阪万博開催後の 1977 年に開館し、入口からオセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、アジアの順に世界各地の民族衣装や人形、楽器、仮面など多種多様なものが展示されていた。触ってみる展示や電子ガイドの貸し出し、学習コーナーなどもあり、世界の民族について詳しく知ることができた。たくさんの展示の中で私は朝鮮半島のキムチについて興味を持った。これからキムチはどのようにして作られ、発展したのかを述べていきたい。

2. キムチについて

キムチは世界的にも有名な漬け物で、日本においてもスーパーでよく見かける漬け物である。佐々木道雄氏によると、現在では一年中にわたりキムチが食べられているが、キムチは本来冬に備えた保存食の役割があった。キムチは朝鮮半島の漬け物というイメージが強いが、起源は中国とされる。中国最古の詩篇である詩経によると「^{あづ}畑の^{うり}畦に瓜がなつた。皮を剥いで^そ菹に漬けて、祖先に捧げ、寿を謳い、天の授ける福を祈ろう」という記録がある。菹とは漬物のことで、詩経の周の時代には祖先に捧げる供物の中に漬物が使われていたことがわかる。その後、中国の漬物文化が朝鮮半島に伝った¹⁾。



写真 9-1 木製のキムチ甕（国立民族学博物館蔵、標本資料番号：H0209999、撮影：中西崇也）

また、同氏によると「朝鮮古代の漬物は、今日のようなキムチではなく、日本と同様のもの、つまり^{かい}醃タイプの漬物」であったという²⁾。今日のキムチは^{ちんさい}沈菜タイプという漬け汁ごと食べるタイプで、醃タイプは洗うか絞るかして食べるタイプのことである。高麗時代に入ると醬漬けと塩漬けの漬物が登場した。李朝時代の 1570 年代には^{とうがらし}唐辛子が日本を経由して朝鮮半島にもたらされる。16 世紀になると、^{ねぎ}葱、^{にんにく}大蒜、^{しょうが}生姜、^{とうがらし}唐辛子、^{にら}菹などの香辛料を加えたキムチが現れ始める。18 世紀中頃までには香辛料入りのキムチが主流となるが、当時は^{ねぎ}葱や^{にんにく}大蒜入りのものが多く、^{とうがらし}唐辛子入りのキムチはまだ少なかった³⁾。

19 世紀に入ると急激に唐辛子入りのキムチが作られるようになり、19 世紀末にはキムチのほとんどが唐辛子入りであった。しかし当時のキムチは糸唐辛子が使われていたために赤くはなく、飾りという役割が大きかった。20 世紀前半になると唐辛子をみじん切りにして使われるようになり、今日の赤いキムチが作られていった。キムチは甕に漬けられ、

甕の数がその家の財力を表すとされていた⁴⁾。

キムチを漬ける甕は、主に陶器でできているものが多いが、一部では木製のものが使われており、木製の甕が国立民族学博物館で展示されている(写真 9-1)。

甕は^{チャントクテ}醬甕台と呼ばれる家の中庭に置かれていたため、漬けられる時期が限られていた。1984 年に金星社(現在の LG 電子)によってキムチ冷蔵庫が発売されたが、当時は甕に漬ける家が多く、現在のように普及はしなかった。だが 1995 年に Winia Mando(現在の大有ウィニア)がキムチ専用冷蔵庫を発売すると急激に普及し、現在では 1 家に 1 台あるほど普及している(写真 9-2)。キムチ冷蔵庫の登場で 1 年中にわたりキムチが食べられるようになり、キムチ文化に大きな変化をもたらした⁵⁾。



写真 9-2 キムチ冷蔵庫 (国立民族学博物館蔵：標本番号：H0209875、撮影：中西崇也)

3. 最後に

国立民族学博物館では、他にもイースター島のモアイ像やモンゴルのゲルなどが実物大の大きさで展示されており、身近に世界の民族の文化に触れることができとても勉強になった。知らないことも多く、私は今回のフィールドワークを通じてさらに世界の文化に触れ学んでいきたい。

【注】

1) 佐々木道雄 2009『キムチの文化史』福村出版, p.18.

2) 同書, p.24.

3) 同書, p.33-46.

4) 同書, p.46-63.

5) KBSWORLDRADIO. “第 477 話 進化するキムチ冷蔵庫”.

http://world.kbs.co.kr/service/contents_view.htm?lang=j&menu_cate=&id=&board_seq=349327 (最終閲覧日：2021 年 1 月 22 日) .

【参考文献】

佐々木道雄 2009『キムチの文化史』福村出版. 国立民族学博物館. “木製のキムチ甕 標本番号：H0209999” <https://www.minpaku.ac.jp/museum/exhibition/main/korea/04> (最終閲覧日：2021 年 1 月 20 日) .

国立民族学博物館収蔵資料データベース. “キムチ冷蔵庫 標本番号：H0209875”. http://htq2.minpaku.ac.jp/infolib/meta_pub/CsvSearch.cgi (参照日：2021 年 1 月 20 日) .

KBSWORLDRADIO. “第 477 話 進化するキムチ冷蔵庫”.

http://world.kbs.co.kr/service/contents_view.htm?lang=j&menu_cate=&id=&board_seq=349327 (参照日 : 2021 年 1 月 22 日) .

キリスト教の復活祭

国際観光学部 2 年 馬仲明 (Matias Joaquim Manuel)

1.はじめ

中学時代、私はカトリックの学校で勉強してきたため、宗教に少し興味を持っている。宗教は人間の文化の重要な部分であり、効率と科学理論が重視されている現代社会でも、人々の生活習慣や思想に影響を及ぼし続けている。本レポートでは、宗教の影響下で生まれた文化のひとつ、キリスト教の復活祭について調べて行きたい。

2.復活祭とは

復活祭とは救世主イエスが死後 3 日目に復活したことを祝うための祭であり、キリスト教の最大の行事である。復活祭の特徴の 1 つは、祭の日は年ごとに変わる可能性があるということだ。国立天文台暦計算室により、「復活祭の日は早いときで 3 月 22 日、遅いときでは 4 月 25 日になり、これは（イースターが）春分の日以後の満月より後にくる最初の日曜日という複雑な定義になっているからだ」ということがわかった¹⁾。このように、復活祭の日は複雑な定義により、固定されなく、移動祝祭日とも言われている。

3. 復活祭の 1 週間前：「枝の主日」

復活祭を迎える 1 週間前に「枝の主日」がある。それでは、なぜ「枝の主日」と呼ばれるのか、復活祭との関係は何なのか。これについて、パリ日本人カトリックセンターは以下の通り述べている。

新約聖書（マタイ福音書 21 章 1～11 節および平行箇所）によれば、イエスが十字架につけられるためにエルサレムに入城する際、群衆が枝を持って迎えたという。教会はこの出来事を復活へ向かうイエスの受難の始まりとして記念するため、実際に枝を用いて典礼を執り行う。このため、「受難の主日」または「枝の主日」と呼ばれる。「枝の主日」は復活祭の直前の主日であり、この日からの一週間を聖週間という²⁾。

このように、復活祭は「枝の主日」から一週間後の日である。イエスの復活を祝うため、人々は復活祭の一週間前から事前準備をし始める。

また、「枝の主日」に人々は何をするかというと、季刊民族学にあった新兎光比呂氏の記事によると、ルーマニアでは、「教会でミサがおこなわれ、村人は聖別されたネコヤナギの枝を家に持ち帰る。この枝は台所の隅に置かれて、家族も健康を守るとされる」ということがわかった³⁾。このように、枝を家に持ちを通じ、昔の群衆と同じように、枝を持ってイエスを迎えるようになると考えられる。

4. 復活祭とその前日

復活祭の前日、人々は特定の食事をしたり、体と家を綺麗にする。また、町では復活をイメージする商品が並べられている。季刊民族学にあった新兎光比呂氏の記事ではルーマニアのイースターの様子を以下の通り述べている。

村人は子羊を屠ってごちそうを用意し、家の中をはき清め、前日には身体を洗って祭日に備える。また町では様々に彩色された卵が市場で並べられ、この卵は元々生命とその再生をあらわす象徴として世界で用いられる。とにかく復活祭には色を塗った卵を贈りあうことが習慣となり、後に子供の遊びになった⁴⁾。

最後、復活祭の日に、人々は用意したものを教会に持ち込み、祝福をうけ、家で食べる。季刊民族学にあった新兎光比呂氏の記事によると、「復活祭当日には夜が明けやらぬ頃からミサが教会でおこなわれ、村人はこの日のために用意した食物を教会で司祭から祝福を受けてもらい、家庭で食する」ということがわかった⁵⁾。

5. まとめ

「枝の主日」から復活祭まで、イエスを迎えたため、キリスト教は日々をかけ、様々な工夫をした。そこで、宗教は自ら独特な文化を生じ、世界の豊かな文化の構成要素のひとつになる。祭以外も、宗教は文学、建築、芸術、音楽、法律、道徳、哲学、さまざまな分野で優れた貢献をもたらしている。それは、科学の進歩により、簡単に淘汰されるものではないと私は考えた。

【注】

1. 国立天文台「イースター」暦 Wiki
<https://eco.mtk.nao.ac.jp/koyomi/wiki/A5A4A1BCA5B9A5BFA1BC.html>（参照日 2021 年 4 月 16 日）。
2. パリ日本人カトリックセンター「第十六回 枝の主日（受難の主日）les Rameaux: Dominica in palmis de Passione Domini」 <https://www.paris-catholique-japonais.com/cours/cours16.htm>（参照日 2021 年 4 月 16 日）。
3. 新兎光比呂 2019 「キリスト教の年中行事と暦：ルーマニアを中心として」『季刊民族学』168, p.27.
4. 同上
5. 同上

【参考文献】

1. 国立天文台「イースター」暦 Wiki

<https://eco.mtk.nao.ac.jp/koyomi/wiki/A5A4A1BCA5B9A5BFA1BC.html>（参照日 2021 年 4 月 16 日）.

2. パリ日本人カトリックセンター「第十六回 枝の主日（受難の主日）les Rameaux: Dominica in palmis de Passione Domini」 <https://www.paris-catholique-japonais.com/cours/cours16.htm>（参照日 2021 年 4 月 16 日）.
3. 新兎光比呂 2019「キリスト教の年中行事と暦：ルーマニアを中心として」『季刊民族学』168:24-30.



写真 10-1 イースターエッグ、ルーマニアほか（国立民族学博物館蔵：標本番号 H64552
ほか、撮影：渡辺和之）

キリスト教について

国際観光学部 2 年 鍵 俊生

私たちは 2020 年 12 月 17 日に大阪府の万博記念公園の中にある、国立民族学博物館をフィールドワーク活動のため訪れた。私は本来ラグビーなどのスポーツについて調べようと思っていたが、スポーツについての資料が国立民族学博物館にあまりなかったので、展示場のなかで気になったキリスト教について調べまとめることにした。

まず高橋裕史氏によると、令和元年（2019 年）は「ローマ教皇パウルス三世の勅書¹⁾によってイエズス会が公認されてちょうど 480 年、また我が国の重要文化財に指定されることになったザビエルの肖像画の発見からも 100 年という節目の年」ということがわかった¹⁾。

キリスト教を日本に布教した人といえば、一般的にはフランシスコ・ザビエルが有名である。他はあまり知られていないと思うが、イエズス会の誕生にはシモン・ロドリゲス、ディエゴ・ライネス、アルフォンソ・サルメロン、ニコラス・ボバディリャ、ピエール・ファールブルにザビエルをいれた 6 名、さらにはイエズス会を立ち上げたとされているロヨラを含め 7 名によってイエズス会は誕生したそうだ²⁾。

他に、日本でキリスト教といえば、かくれキリシタンという言葉が知られていると思う。これは、日本に伝わったキリスト教を信仰する「キリシタン信仰を江戸時代に徳川幕府によって同信仰が禁教とされた後も信者が継承したもの」のことである³⁾。このように当時は政府がキリスト教を禁止にして踏み絵などを実施してキリスト教徒を見つけ出すなど、キリスト教が国内で認められていなかった。

国立民族学博物館にはキリスト教に関係する様々な資料が展示してあった。たとえば、キリスト教の巡礼地には、殉教者を記念する場所として、サンチャゴ・デ・コンポステラ（スペイン）、聖母出現の場所としてルルド（フランス）、イコンに奇跡が生じたニクラ（ルーマニア）などがあるというように、様々な場所が巡礼地とされていることを学んだ。他にもとてもたくさんの種類の十字架が展示されていたり（写真 11-1）、キリストや聖母マリアなどのイコン（聖像画）をあらわしたペンダントやネックレスなどもたくさんあった（写真 11-2）。

キリスト教のことは少し学んでいたの知っていたこともあったが、私が知らないことが大半で、初めて知ったことが多かった。

【注】

- 1)高橋裕史 2020 「世界史のなかのイエズス会と日本布教」『季刊民族学』174, p.4.
- 2)前掲書 p.7.
- 3)中園成生 2020 「かくれキリシタンの信者と信仰」『季刊民族学』174, p.40.

【参考文献】

- ・高橋裕史 2020 「世界史のなかのイエズス会と日本布教」『季刊民族学』174: 4-12.
- ・中園成生 2020 「かくれキリシタンの信者と信仰」『季刊民族学』174: 40-49.



写真 11-1 さまざまな十字架（国立民族学博物館蔵、撮影：鍵俊生）

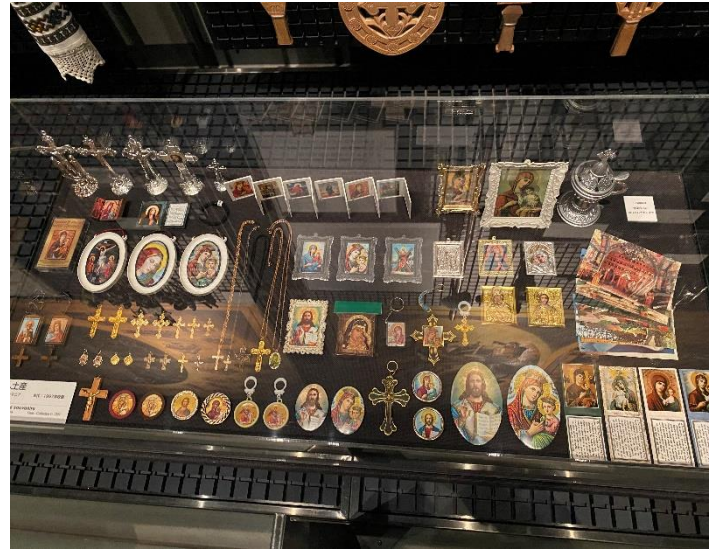


写真 11-2 イコンを表したペンダントやネックレス（国立民族学博物館蔵、撮影：鍵俊生）

ねぶた祭から学ぶ各地の伝統的な祭

国際観光学部 2 年 園山 蓮

1. 日本の伝統的な祭り

今回、国立民族博物館を見学するにあたり、私は日本の文化や歴史について、季刊民族学のテキストなどで事前に調べた。博物館を見学して私がもっとも興味を惹かれたのは日本各地にある伝統的なお祭りである。青森で言ったらねぶた祭、京都は祇園祭、東京は神田祭など、日本には各地に大きな伝統の祭りがたくさんある。自分の地元の島根県の中だけでも各地の町にその土地柄に関係した昔からの祭りが点在している。そのなかで最も自分が興味を沸いたのは、青森県のねぶた祭、弘前ねぶた祭で、この祭りについて調べていき、地元島根県の祭りを調べた。

2. ねぶた祭の歴史

「ねぶた祭りは元々、七夕祭りの灯籠流しの年を追うごとに変わっていった形と言われている、古来から津軽にあった習俗と精霊送り、人形、虫送り等の行事が一体化して、紙と竹、ローソクが普及されると灯籠となり、それが変化して人形、扇ねぶたになったと考えられている。『ねぶた』という名称は、東北地方をはじめ、信越地方の『ネンブリ流し』 関東地方の『ネブチ流し』・『ネボケ流し』・『ネムッタ流し』等の民族語彙分布と方言学から『ねむりながし』の眠りが『ねぶた』に転訛したものと考えられている」¹⁾。この事柄からもわかるとおり、日本では昔あった風習が形を変えて残っている物が多々ある。

3. ねぶた祭の概要

ねぶた祭は、ねぶたと言われる最大 5m の人形の周りを跳人（はねと）と呼ばれる踊り手がねぶたの周りを取り囲み、お囃子の音に合わせて元気よく跳びはねる姿が夏の風物詩になっている祭りで、7 月から 8 月の間に青森県内各地で行われる。有名なところで言うと、青森ねぶた祭、弘前ねぶたまつり、五所川原（ごしょがわら）立佞武多（たちねぶた）祭りなどがある。特に青森ねぶた祭と弘前ねぶたまつりは重要無形民俗文化財に指定されているほど貴重なものである²⁾。

4. 島根のお祭り

私の地元は小泉八雲も愛したとされる島根県松江市である。ここにも青森県と同じように昔から続いているホーランエンヤという伝統的なお祭りがある。また、岩見地区には鷺舞神事というお祭りもある。まだまだ全国的には知られていないが、過疎と

呼ばれる地域にも各地に伝統的なお祭りがある。たとえば、ホーランエンヤは10年1度行われる祭りで、大阪府の天神祭り、広島県は厳島神社の管弦祭と並ぶ日本三大船神事の1つで、水の都と言われる島根県松江市の大橋川と意宇川を約100隻の船が川沿いの神社を巡っていくお祭りで370年の歴史を持つという³⁾。

5. まとめ

日本には上記にも書いたとおり、各地に伝統的でその土地に関連付いている祭りが多種多様で点在している。島根県をはじめとする過疎と言われる地域はまだまだ力がある。それは食べ物、伝統工芸品、自然、土産物など各分野に魅力が眠っていることからわかる。私も大学で観光を専攻している者として、このような魅力的なお祭りを発掘したり、将来的には地元で働き誰でも利用しやすいような観光をデザインすることで、自分の地域のまちづくりに尽力していきたいと感じた。



写真 12-1 ねぶた祭りの練り物（国立民族学博物館蔵：標本番号 H0037375、撮影：園山蓮）

【注】

- 1) 青森県ねぶた祭り実行委員会事務局「ねぶたの由来」
<https://www.nebuta.jp/know/origin.html/>（参照日：2021年1月20日）。
- 2) 違いがわかる事典「「ねぶた」と「ねふた」」<https://chigai-allguide.com/>（参照日：2021年1月20日）。
- 3) 小泉凡 2019「怪異研究」『季刊民族学』千里文化財団 170, p.56.

【参考文献】

小泉凡 2019 「怪異研究」『季刊民族学』千里文化財団 170:56-61.

青森県ねぶた祭り実行委員会事務局「ねぶた祭の歴史」

<https://www.nebuta.jp/know/origin.html/>（参照日：2021 年 1 月 20 日）.

2) 違いがわかる事典.”ねぶたとねぶたの違い <https://chigai-allguide.com/>（参照日：2021 年 1 月 20 日）.

民博の日本酒

国際観光学部 2 年 陳典 (CHEN DIAN)

今回は国立民族学博物館（民博）でフィールドワークを実施した。私は興味を持っているのは日本酒である。日本酒に関する文化、そして日本文化の中でどんな地位を持っているのかが本レポートの目的である。

日本酒は和食中に重要な地位を持っている。神崎宣武氏によると、共同飲食による人と人との親密さを確かめるのに、酒が果たす役目は大きい。酒がまわれれば、歌舞も音曲も登場する。世界の伝統的な社会に共通するハレの行事の原理のようなものである。日本での酒は、神事と密接な関係をもって発達した。酒は、古くはまつりにあわせて仕込むものであった¹⁾。古代から、酒は飲むだけでなく、神事やまつりで使う場合も多いようである。

展示コーナーでは、日本の中華料理店の酒器が展示されている（写真 13-1）。残念ながら、日本酒に関する展示物は見つけれなかったが、日本の中華料理店の酒器を見つけることができた。これも日本酒の一つの発展形態と言えるだろう。



写真 13-1 中華料理店の酒器
(国立民族学博物館蔵、撮影：CHEN DIAN)

日本酒が民間の飲食へ普及したのは江戸時代からだ。神崎宣武氏によると、現代の清酒に通じる酒が作られるようになったのは、室町後期から安土・桃山時代にかけてのことである。江戸時代になると、伏見や灘・伊丹に酒造地が形成された。灘の酒を江戸へ運ぶのを専業としたのが、樽廻船である。その廻船の制度が整ったところで、江戸の町人は清酒になじむことができたのだ²⁾。そして日本全体へ清酒の飲酒が普及したのはなお後のことである。日清・日露戦争から後に酒造量が増加し、明治中期以降になると、地方で酒造が企業化した。また、小売容器としての貧乏徳利も普及している。これらのことをみても、明治という時代に日常的な飲酒習俗が広まった事実が明らかになるのである³⁾。

最後に、今回フィールドワークは、多くの国々の民族文化を見学してとても感動した。その中に自分の国の展示物も見た。親近感を感じた。別の民族の文化を見て、その民族を見直したこともあった。私は以前から日本の飲食文化について興味がある。だから今

回は日本の酒文化について詳しく勉強した。違う文化を知るには何だか不思議な感じがする。

【注】

- 1) 神崎宣武 2017「日本酒の民俗学」『季刊民族学』41(1), p.14.
- 2) 同上, p.18.
- 3) 同上, p.19.

【参考文献】

神崎宣武 2017「日本酒の民俗学」『季刊民族学』41(1):14-19.

あとがき

民博フィールドワークも、今年で2度目である。アジアの文化に関心を持ち、ゼミに入
った学生だけあって、民博でも学生たちはよく学んでいた。また、第2波と第3波の間の
ちょうど谷間に訪れることが出来て、本当に良かった。

その後、報告書の作成が年度内に終わらず、新年度に持ち越してしまった。2年生だっ
た彼らは現在3年生に進級した。彼らを海外に連れ出すのは依然として厳しい状態であ
る。とはいえ、幸い、2021年6月には、第4波の緊急事態宣言が解除され、日帰りでの
フィールドワークが可能となった。

今年は、夏休みに奈良でお茶のフィールドワークをおこなうことを考えて、準備を進め
ていたが、第5波で11月に延期になった。お茶ならば、近くで学んでおけば、国内各地
や海外でのフィールドワークが再開した場合でも、比較が可能になる。日本を見た視点
で、海外の文化を学んで欲しい。また、中国人の留学生が日本の文化をみて何を考えるの
か楽しみである。

コロナ禍も2年目になったが、出来る時に出来ることをすすめておくのが大事なことで
ある。外に出られない時には教室で文献を読み、レポートをまとめる。日帰り調査の許可
が出たら、近くでできることを調査する。それだけでも、十分に学習効果はあることがわ
かってきた。

せっかく面白い学生たちに恵まれたのである。この機会を大事にして、できることを出
来る時に進めてゆきたいと思う（渡辺和之）。

+++++
渡辺和之（編）『2020年度後期基礎演習フィールドワーク報告書：みんなくレポート』阪

南大学国際観光学部渡辺研究室 2021年11月30日発行

〒580-0033 大阪府松原市天美南 1-108-1 阪南大学国際観光学部

電話：072-332-1224 メール：watanabe@hannan-u.ac.jp URL <https://www.hannan-u.ac.jp/>

Kazuyuki Watanabe (ed.) 2021 Minpaku Report. Students' Fieldwork Reports 2020.

Osaka: Faculty of International Tourism, Hannan University.

Address: 1-108-1, Amami-Minami, Matsubara, Osaka, 580-0033, Japan.

E-mail: watanabe@hannan-u.ac.jp

+++++